

## 研究課題名：

胚細胞性腫瘍および精巣腫瘍症例の診断、治療経過に関する臨床研究

## 研究対象

1997年から2016年6月までに、国立がん研究センター中央病院にて病理学的に胚細胞性腫瘍および精巣腫瘍と診断されている患者の診療録を対象とします。

## 研究の概要：

生殖機能に直接関係のある細胞を胚細胞と呼び、胚細胞由来の腫瘍を胚細胞腫瘍といいます。精巣腫瘍の95%は精巣から発生する胚細胞腫瘍で、男性特有の腫瘍です。精巣腫瘍の罹患率は10万人に1人程度とされ、20歳代後半から30歳代にかけて発症のピークがあり、若年者に多い特徴があります。精巣腫瘍は、セミノーマ（精上皮腫）とそれ以外の非セミノーマの2つに大分類されます。非セミノーマにはさまざまな組織型があり、胎児性がん・絨毛がん・卵黄嚢腫・奇形腫などに分類されます。病期分類には日本泌尿器科学会の精巣腫瘍病期分類が使用され、このうち病期Ⅰ期までを限局がん、Ⅱ期以上を進行がんと呼びます。一般的にⅠ期の限局がんでは、高位精巣摘除術の手術治療のみで治癒できることが多く、5年生存は99.2%と報告され非常に良好です。転移を有するⅡ期以上の進行がんの患者さんでは化学療法及び手術療法の集学的治療が必要なことが多く、International Germ Cell Consensus Classification (IGCCC) 分類に基づいた導入化学療法が施行されます。化学療法後の腫瘍マーカーが正常化した後に、非セミノーマでは後腹膜リンパ節郭清を含む転移巣切除を行うことが一般的です。精巣腫瘍はセミノーマでは非常に化学療法感受性が高く、転移があっても完全治癒を目指せるがんと言われていますが、遠隔転移を有するⅢ期では5年生存率が73.1%と未だ十分とは言えません。

そのため、胚細胞性腫瘍および精巣腫瘍の臨床的ならびに病理学的因子から予後因子を同定し、最善な診断・治療戦略を組み立てることが重要な研究課題となっています。

## 目的：

胚細胞性腫瘍および精巣腫瘍と診断された患者を対象に、臨床情報、手術情報、病理学的情報、化学療法の治療情報などのカルテ情報から診断、治療成績を確認するとともに、今後の臨床的課題を探索するための調査を行うことを目的とします。

### 研究の意義：

胚細胞性腫瘍および精巣腫瘍の患者さんは、症例数も少ない希少がんであるため、解析に症例蓄積が必要な腫瘍です。若年者に好発するため、完全治癒後も化学療法の後遺症、妊孕能の問題、職場社会の受け入れなども問題が発生します。一方、転移を有する進行性難治がんは未だ予後不良で、新規治療開発が必要です。これらの理由から、疫学的に患者さんを検討することには十分な意義があると考えています。

### 方法：

国立がん研究センター中央病院にて 1997 年から 2016 年 6 月までの間に胚細胞性腫瘍および精巣腫瘍と診断された患者さんのカルテを調べます。今回はすでに治療の過程において得られた臨床情報や既に摘出された病理標本を再度見直すのみですので、対象となる方に新たな検査などの負担をおかけすることはありません。情報収集の作業に当たる人は当院の医療従事者ですので、外部に情報が漏れる心配はありません。

### 個人情報保護に関する配慮：

閲覧する診療録には個人情報が含まれますが、患者さん個人が直接特定されない方法で情報を収集します。対象となる患者さんの識別は個人識別番号、カルテID、誕生日を使って管理し、厳重な方法で管理され個人情報が院外に出ることはありません。また、個人が特定されるような情報は一切公表しません。このような理由から患者さん個別に説明し同意をいただくことはしておりません。ただし患者さん等からのご希望があれば、その方の診療録は研究に利用しないようにしますので、いつでも次の連絡先まで申し出てください。また、治療当時に未成年であった患者さんの情報が含まれる可能性があります。その場合は、ご本人に加え、保護者の申し出により使用拒否ができますので、申し出てください

### 研究代表/責任者：

国立がん研究センター中央病院 泌尿器・後腹膜腫瘍科 医員：原 智彦

### 照会先および研究への利用を拒否する場合の連絡先：

〒104-0045

国立がん研究センター中央病院 泌尿器・後腹膜腫瘍科 原 智彦

TEL03-3542-2511(内線 7388) Fax 03-3542-3815